

夢屋敷

たなかなつみ

Anima Solaris

夢がわたしを迎えに来る。

夢は変わらずわたしをとらえにくる。子どもの声。虹色の光。真綿でくるまれたような感触。

極彩色の風景。血の匂い。皮膚をそがれる痛み。

甘やかな恍惚感。

子どものころから絶えず、夢はわたしのそばにいた。わたしはいつも夢に包まれ幸せだった。

夢がわたしから去ったのは、わたしが初潮を迎えた日だった。

その日から、わたしは夢から遠ざけられ、服を着せられ、学校へ行かされた。学校へ行くことは苦痛ではなかったが、幸せと言える感覚はわたしから遠ざかった。

夢に渴いて夜目覚める。

泣きながら夢の喪失を訴えるわたしに、けれども家族には何もできなかった。わたしは夢を探し、物語の世界に耽溺した。けれどもそこにあるのはつくられた物語で、夢ではなかった。物語は、いつも終末を迎え、わたしを悄然とさせた。そこは閉じた世界で、わたしはその世界には入れなかった。

やがて、夢のない世界にも、わたしは慣れた。わたしは生きていかねばならなかった。食べ、咀嚼し、はいずり回らなければならなかった。

わたしは、夢を封印した。

わたしは恋をした。ひそやかな声で喋る優しい男だった。わたしは男と腕を組み歩き、ベッドのなかで睦言を交わした。男の体液をからだにまとい、わたしはまた幸福ということを知った。

わたしと男は些細なことで喧嘩した。男は怒りをあらわにすることはなく、激高するのはいつもわたしのほうだった。泣き、わめき、あたりちらすわたしを、男は辛抱強くなだめ、諭した。男はわたしを理解することはなかったが、わたしを否定することもなかった。わたしはいつも男の優しい胸のなかで、甘やかな眠りについた。

男はわたしの何倍も物知りで、わたしの何倍も勉強家だった。男の開く書物のほとんどはわたしには解読できず、男の書く文章もまたわたしには難解だった。けれどもわたしは飽くことなく、男のそばにまわりついた。男もけっしてわたしを邪険に扱わなかった。

男とのセックスは、とりわけわたしを夢中にさせた。それは、わたしから遠ざかった夢に似ていた。聞こえない声、見えない風景が、触れられないものが、わたしとともにあるかのような錯覚をわたしに抱かせた。わたしは何度も男にセックスをねだった。男もその求めに応じた。

わたしは男とともにあり、幸せだった。

男が手のひらを返したようにわたしに背を向けたとき、わたしにはその理由がわからなかった。わたしと男とは、誰をもあいだに介さない蜜月を過ごしていたはずだった。男が自分から離れていくことなど、想像だにできないことだった。

男は、あなたが嫌いになったわけではない、と言った。

ただ、ぼくは行かなくてはならないのだ、と。
なぜ。

呼ばれたからだ、と。

どこへ。

わたしは泣きわめき、とりすがり、部屋中のものを投げつけた。男の鞆を隠し、男の帽子を隠し、男の靴を隠した。けれども、男はわたしのもとにはとどまらなかった。

男は大事そうに一冊の本を抱え、寝癖をつけた髪をなでつけることもせず、裸足のままわたしのもとから旅だった。

わたしは、部屋のなか、ひとりだった。

わたしはまた取り残されたのだ。

けれども、男への想いを、封印することはできなかった。わたしは荒れ散らかった部屋のなかで、男が残していったものを子細に点検した。男が触れたと思われるところすべてに唇をつけた。男が目を通したと思われるものすべてに指を這わせた。

けれども、それはなにひとつわたしに鍵をもたらさな

かった。

絶望という言葉を、わたしはそのときに知った。

男の持ち物の大半は書物だった。束の厚い大きな革装版の書物だった。ごとりという音をさせながらそれを取り出し、広げ、わたしはそのなかの文字の羅列に見入った。それはわたしにはわからない言葉で書いてあり、わたしにはその意味はつかめなかった。けれどもわたしの目はずっとその文字を追い、わたしの指は飽くことなくページを繰った。

書物のなかには、挿し絵のあるものもあった。たいていはそこに数値が穿たれた、難しい図表だったが、ときどき、イラストや写真が入っていることもあり、意味のつかめない文字を追うことに疲れたわたしの目を楽ませた。

ところどころに、男の手で、メモが付してあるところもあった。わたしはそれを目を皿のようにしてたどった。もちろん意味はわからない。ただ、男の残した痕跡を愛しむことを、わたしは自らに課していた。

それは甘やかな苦行だった。

兄がやってきた。この部屋を解約して引っ越すこと、男の持ち物をすべて処分することを、わたしに進言した。わたしは聞く耳を持たなかった。

このまま、男の思い出と朽ちることは許さない、おまえはおまえの人生を新たにはじめるべきだ、と、男とはまったく異なる激しさで、兄はわたしを怒鳴りつけた。

けれども、わたしには兄の声は届かなかった。

兄の声が届いてこない？

わたしは、そのことに気づき、目を上げた。

兄がわめき、ののしる様は見えた。書棚を拳で殴り、わたしを指さし、唾を飛ばしていた。

けれども、兄の声が、わたしから遠ざかりつつあるのを、わたしははっきりと感じた。

わたしは手をのばした。兄の姿が歪む。わたしは金切り声をあげていたかもしれない。兄の姿が縮む。

そうして、兄すらもわたしから遠ざかり消滅し、わたしはただ部屋のなか、ぽつんとひとり残された。

わたしは男の残していった本を抱きしめ、うずくまっていた。

やがて、少し落ち着いたわたしは、本を抱えたまま玄関まではいずっていき、そつと扉を開けた。

外には虚無が広がっていた。

わたしは扉を閉めた。わたしは世界から閉め出されたのだ。

なによりも、これで男とふたたび会うことがかなわなくなったことを思い、わたしは涙した。

日がな一日、わたしは男の残した書物を眺めて過ごした。相変わらず意味はさっぱりわからなかったが、なぜか笑いがこぼれる箇所があり、なぜか思い悩まされる箇所があった。ある意味わたしはその書物を読んでいたと言えるのかもしれない。けれども、いつまで経っても、わたしにはその文字の意味するところはわからないままだった。

あるとき、同じようにページを繰っていたわたしの手が、ふと止まった。理由は自分にもわからなかった。けれども、そのときのわたしは笑みを浮かべており、明らかに鼓動が早くなっていた。

わたしは立ち上がり、男の持ち物のなかから虫眼鏡を探し当て、それを手に戻った。

そして、そのページを端から端まで食い入るように見つけた。

最初、わたしはすぐにあきらめた。そしてまた新たにページを繰ろうとした。

けれども、わたしの手はどうしてもそのページから次に移ろうとしなかった。

わたしはもう一度虫眼鏡を持って、そのページを眺めた。なんの変哲もないページに見えた。相変わらず意味のわからない文字が並んでいるだけ。抽象的な内容が書いてあるのか、手に汗握るような冒険小説が書かれてあるのか、

そんなことすらわたしにはわからない。

わたしは疲れて虫眼鏡を離そうとした。けれども、わたしの手はどうしてもその作業をやめようとしなかった。わたしは疲れた目で、何度も同じ作業を繰り返した。

不意に、画像が拡大した、ように見えた。

わたしは目をこすった。なんの変哲もない文字の並んでいるページが、虫眼鏡の向こうにあった。けれども。

画像が、拡大した。

わたしはまばたきを忘れ、虫眼鏡のなかに見入った。

画像が、拡大した。

まだそれは、文字の羅列だった。けれども徐々に。

画像が、拡大した。

徐々に。

画像が、拡大した。

徐々に、それは、行間から姿を現し。

画像が、拡大した。

その姿が鮮明に。

画像が、拡大した。

鮮明に、虫眼鏡を通して姿を現してきた。

画像が、拡大した。

わたしは食い入るようにそれに見入った。まるで。

画像が、拡大した。

それが、わたしを誘うかのように。

画像が、拡大した。

それは。

画像が、拡大した。

それは、古い古い屋敷の姿で。

画像が、拡大した。

古い古い屋敷の姿で。

画像が、拡大した。

そして、その窓の向こうに、わたしは愛しい男の姿を、見た。

やっと鍵に出会えたのだ。わたしの口からは笑みがこぼれていた。

わたしは着ているものをすべて脱いだ。それは男とベツドに入っていたときのわたしの姿であり、また、夢がわたしを訪れていたころのわたしの姿でもあった。

わたしはバスルームに入り、カミソリを取り出した。そしてそれを肌にあて、しゅつとひと引きした。

つーつと、部屋の真ん中に赤い線が走り、その線から赤い粘液質のものが流れ出したのが見えた。風景が徐々に赤に染まる。

わたしはそのなつかしい風景に、我知らず笑みをこぼしていた。

わたしは化粧水の瓶をバスルームにたたき落とし、その

破片を裸足で踏み砕いた。

足元から、きやあきやあと子どもの叫び声がする。

わたしは洗濯紐をはり、それに首をかけた。気が遠くなるような痛みと愉悦。

快樂。

おいで。

ああ、こんなに簡単なことだったなんて。

そうしてわたしは、はじめて自分から、夢を呼んだ。

あなたが行かなければならなかったのなら、あたしのほうからそこへ行つてあげる。

夢のなかで、わたしは幸福だった。むせるような血の匂い。耳をつんざくような子どもの叫び声。拘束具に締め付けられたかのようなからだの痛み。

すべてが、わたしに快樂を呼んだ。

虹色の風景のなか、わたしは記憶の糸をたどった。夢は絶えずわたしとともにいた。すべての夢がわたしとともにあった。

夢の風景を、わたしは順次ひもといた。

そのすべてが、快樂とともにわたしにあった。けたたましいまでの歓喜の叫びがほとぼしり、わたしは自分の耳をふさがなければならないほどだった。すべての

記憶がわたしとともにあり、男の記憶もまた同様にそこにあった。

まばたきするほどの間に次から次へと過ぎていく景色のなか、わたしはずっと男といっしょだった。わたしは笑っていた。わたしは泣いていた。わたしは怒っていた。そのあいだずっと男はわたしとともにあり、わたしを見ていた。それは夢だった。男はわたしを見て、笑顔を向け、あのひそやかな声で話しかけた。甘美な夢。嘘偽りのない夢。

夢。

わたしは夢の男に自分の意識を重ね合わせ、入り込んだ。ぐるりと景色がまわった。わたしは男の目をのっとり、男の耳をのっとり、男のからだを占拠した。

男になったわたしの前に、すべてのわたしがいた。夢のわたしは無表情に、こちらを見ていた。無表情にこちらを見て。

あなたは誰？ と言った。

わたし？ わたしは、わたしだ。

わたしは夢のわたしに口づけた。夢のわたしと夢の男を占拠したわたしの唾液がまじる。そのねっとりした口づけは、苦い血の味がした。

夢のわたしは処女だった。夢のわたしは夢のわたしを犯し、破瓜の血を流させた。夢のわたしは苦痛のなかにも歓喜の声をあげながら悶え、夢のわたしははじめての吐精に

我を忘れた。

ぐるりと景色がまわった。

あたしをつれていって、とわたしが言った。

どこへ？ とわたしが言った。あなたはもう、ここへ来ているのに。

どこかで、鳥のさえずる声がした。

目を開くと、天蓋付きのベッドの上で、女がカーテンを開けるところだった。

ここは？ と問うと、女がいぶかしげに、あなたの部屋ですが、と言う。

シーツをめくると、わたしはなににも身にまといしておらず、女は服の用意をしておらず、なるほど、ここではわたしは裸で過ごすものらしい。

わたしはふくらみのない胸を、下生えのない下腹部を確認した。これでは、まるで少女のころのようだと思う。

そしてぐるりを見渡せば、確かにまるで少女のころのように、夢が訪れてはわたしのからだを撫でていた。

わたしは裸足のままぺたぺたと部屋の外へと出た。夢はわたしについてきた。

広い廊下が延々と続いていた。先は暗闇に隠れて見えない。わたしは行く場所を決めずにぺたぺたと歩き始めた。

廊下は長かった。わたしは歩き疲れ、適当な場所で扉を

開いた。扉はきいと音をたてて開き、なかでは女が掃除をしていた。

ここはどこ？ とわたしが問うと、女はいぶかしげに、あなたの部屋ですが、と答える。

わたしは部屋のなかに入り、ベッドに身を横たえる。

シーツはまだ変えられておらず、破瓜の血と精液で汚れていた。匂いをかぐと、なつかしい匂いがしたが、なんの匂いまでかはわからなかった。わたしはそのまま眠った。

目を開くと、女が食事の支度をしていた。皿のなかには、わたしの目と、わたしの髪と、わたしの爪が入っていた。

わたしはそのスープを音をたててすすった。

夢は相変わらず、わたしのもとへ訪れては、甘美な風景をわたしに見せる。

わたしは夢にくるまれて、幸せな眠りに落ちる。

夢がわたしを迎えにくる。

わたしは裸のまま夢にくるまって、屋敷のあちこちを散歩する。尽きない廊下。動かない部屋。そのなかで、わたしは幸福な幸福な夢を見続ける。

いつか書物が閉じられる日まで。

著者紹介

たなかなつみ (Tanaka Natsumi)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/n-tanaka.shtml>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/n-tanaka/yashiki_index.shtml

著作：夢つかい

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/anthology/ring/tanaka/dindex.html>

ひとりの女が夢を見る

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/n-tanaka/yume_index.shtml

夢屋敷

2005 年 9 月 8 日 第 1 版第 1 冊発行

著 者 **たなかなつみ** (Natsumi Tanaka)

発行人 中条 卓

発行所 アニマソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine>

制 作 松谷 和加子 (電脳工房 りっくらっく)

表 紙 三上 央子 (電脳工房 りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載禁止させていただきます。

希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。